HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	認知的徒弟制と心臓外科医の熟達プロセスに関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	築部, 卓郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(経営学)
Dissertation Number	甲第14311号
Issue Date	2020-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80460
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takuro_Tsukube_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

様式９

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（経営学）　　氏名　築部卓郎

審査委員　　主　査　教授　　平本　健太
副　査　教授　　松尾　　睦
副　査　准教授　相原　基大

学位論文題名

認知的徒弟制と心臓外科医の熟達プロセスに関する研究

医療ニーズの増加、医療技術の進歩、患者の権利意識の高まりに伴い、医師は厳しい労働環境の中で、幅広い臨床スキルを獲得することが求められている。こうした状況の中、日本では外科医を志す若手医師が減少しており、特に心臓外科領域においてその傾向が顕著である。その原因の一つが、心臓外科医として熟達するために長い時間がかかるという点である。しかし、医学教育に関する研究は、学部における教育プログラムに焦点が当てられており、卒後における医師育成プロセスは十分に検討されていない。こうした問題を踏まえ、本研究は、認知的徒弟制モデルをベースにして、心臓外科医の育成プロセスを検討することを目的としている。

本論文は、6 章から構成されている。第 1 章では、研究の背景、心臓外科医の育成の現状、研究上の課題、および研究目的が説明されている。

第 2 章では、認知的徒弟制モデルの先行研究がレビューされ、研究課題に対応したリサーチクエスチョンが提示されている。すなわち、認知的徒弟制研究は、「モデリング、コーチング、スキャフォルディング、アーティキュレーション、リフレクション、エクスプロレーション」という 6 つの指導法を中心に研究が行われているものの、職場における対面的な指導状況における研究が不足していることが明らかになった。そこで、本研究では、「認知的徒弟制モデルの 6 次元の指導方法は、若手医師の自己成長感にどのような影響を与えているのか」「短い期間で熟達レベルに達した心臓外科医は、異なるキャリア段階において、どのように育成されているのか」といった問いが立てられている。

第 3 章では、本論文で採用する分析方法が説明されている。まず、第 4 章の定量的分析における研究対象の選定、質問票の設計、調査概要、統計的な分析手法が、次に、第 5 章の定性的分析における研究対象の選定、インタビュー調査の概要、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析手法が、それぞれ詳細に記述されている。

第 4 章では、医師 179 名（外科医 87 名、内科医 92 名）に対して実施した回顧式の質問紙調査データを用いた定量的分析の結果が示されている。重回帰分析の結果、専門領域（内科・

外科）や指導を受けた時期（1〜5 年目）の違いにかかわらず、認知的徒弟制モデルの 6 次元の指導方法が医師の自己成長感を高めていること、また、内科系医師は外科系医師に比べて、コーチング、スキャフォルディング、アーティキュレーション、リフレクションに関する指導をより多く受ける傾向があることが明らかにされている。

第 5 章では、卒後 15 年以内に若くして熟達者となった心臓外科医 9 名を対象としたインタビュー調査データを用いた定性的分析の結果が示されている。第 1 に、キャリアの初期段階ではモデリング、コーチング、スキャフォルディングを中心に指導がなされていたのに対し、中期から後期にはアーティキュレーション、リフレクション、エクスプロレーション中心の指導へと変化していたことが報告されている。第 2 に、中期から後期にかけては、指導全体においてエクスプロレーションの要素が強くなり、また、リーダーシップ力を高める指導が行われる傾向が見られた点が明らかにされている。

第 6 章では、発見事実に基づき、理論的・実践的な貢献が説明され、今後の研究課題が提示されている。

審査委員会では、次に挙げる 2 点において、本研究の理論的貢献を認めることができるという結論に達した。第 1 に、認知的徒弟制モデルの有効性において、キャリア段階がモデレータとして影響を与えていることを示した点である。すなわち、キャリア段階が異なると、認知的徒弟制を構成する 6 次元の重要性が異なることを明らかにした点が高く評価された。第 2 の貢献は、これまで並列的に扱われてきた認知的徒弟制の 6 次元が、キャリア段階が進むにつれて、エクスプロレーションを中心に統合される傾向にあることを示した点である。以上の発見は、キャリア段階という要因を組み込むことで、認知的徒弟制の理論を発展させるものであると考えられる。

なお、審査委員会においては、以下に挙げる 2 つの懸念事項も指摘された。第 1 に、本研究は、心臓外科医に焦点当てていることから、見いだされた知見が、他のプロフェッショナルの熟達プロセスに対してどの程度一般化できるかという問題である。第 2 に、日本の医療慣習や文化が分析結果に及ぼす影響である。

しかし、心臓外科医は高度なスキルが求められるプロフェッショナルの典型であることを考慮すると、本研究の発見は、プロフェッショナル一般の熟達プロセスの本質を解明する上で重要な視点を提供していると思われる。また、本研究をベースとした国際比較分析は、今後行われるべき研究課題であると考えられる。

上記の点を総合的に検討した結果、本論文は、学術研究として高い水準に達しており、審査員全員一致で、博士（経営学）の学位を授与するに値すると判断した。